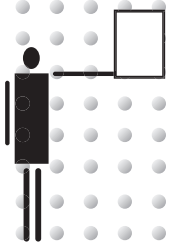
レポートの書き方

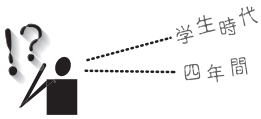
平　等　文　博
人間科学部准教授

1 レポートの基礎知識



（1）大学での勉強とは？

●学生時代に何をするかを考えよう●



昔とちがって今では、大学に進学することがさほど特別なことではなくなりました。「大学ぐらいは出ておいたほうがいい」と思って（あるいは周りから言われて）入学した人も少なくないかもしれません。「大学でこれを学びたい」「学生時代にこれだけのことをしたい」という目的意識もないまま、受験のベルトコンベアーに乗ってただ何となく大学に来てしまい、合格したとたんに目標喪失で勉学意欲が萎えてしまう人も残念ながらまれではありません。「最近の学生は基礎学力も低いし、学習意欲も乏しい」と嘆く声がどこの大学からも聞こえてくる昨今です。

「それは現代日本の社会や教育のあり方に大きな問題があるので、若者・学生の側に原因を押しつけるのは本末転倒だ、むしろまずあなたたちオトナや教育者が自らの責任をきびしく問うべきではないか」と元気のいい学生諸君なら反論するかもしれません。まったくその通りだと思います。社会も大きな変革が求められていますし、教育の目的や方法も根本的に考えなおさなければならない点が多くある、個々の教員ももっと工夫し努力して日々の授業のあり方を改善しなければならない、そうしたことを踏まえた上でみなさんには、「世の中がこうだから」とか「他人がどうだから」とかを逃げ口上にせずに、「自分の人生に最終責任を負うただ一人の人間である“この私”は“いま／ここ”で何をするか／すべきか」を、学生生活を始めるにあたって、また４年間の大学生活を通して、じっくりと考えていただきたいのです。

●“自由に生きることを学ぶ場”である大学●

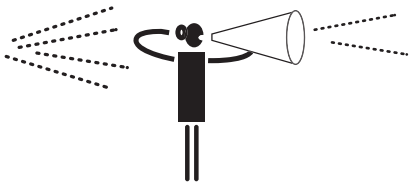
ところで、大学に入学してどんな感想をもちましたか？　大学での“自由度”の大きさに、とまどった人も多いのではないでしょうか。入学してまだ様子もよく分からないのに、カリキュラム表から自分で受講科目を選び自分なりの時間割をつくらなければならないのにまず当惑したかもしれません。また、授業に出ても決められた“自分の席”はふつうありませんし、中学・高校では当たり前だった出欠のチェックがなされない授業も多くあります。担任の先生も自分の教室（ホームルーム）もなく、クラスといってもかなり形式的ですから、教員との関わりや友だちづきあいもお仕着せの枠がなくて自由です。もちろん、高校時代にうるさく言われたかもしれない服装などへの規制もありません。

このような“自由”の環境のなかに、特にこれといった目標も志もなく入り込んだら、その“自由”を“しんどいことは何もしない自由”だと受けとめて無為に日を過ごしたり、アルバイトと遊びだけで学生時代の貴重な時間とエネルギーを使い果たしてしまう人も出てきます。自由はそれを使いこなす能力を身につけて初めて、私たちに大きな可能性を拓いてくれます。逆に自由は、私たちを無責任で自堕落な生活に引きずり込むことで、せっかくの可能性を閉ざしてしまう諸刃の剣でもあります。自由に生きることは学ばれねばならないのです。ですから、大学とはまず何よりも、“自由に生きることを学ぶ場”だと言えるでしょう。

●自由に生きる力を鍛えよう●

自由に生きるとは、言い換えれば自立した一個の人格として創造的に生きることです。自由に生きることの難しさもまたそこにあります。自分で考えて行動しその結果責任を負うということは、知恵と勇気を必要とします。他の人びとと意思を通わせ、共に生きる関係をつくりあげることも不可欠です。

そこで私たち一人ひとりに共通して必要とされるのは、先入観や憶測にまどわされず現実をしっかりと見つめること、そこでいま何が問題となっているのかを見抜くこと、問題解決のために何が必要かを考えること、そして自分が発見したことを他の人びとに理解できるよう表現し伝え、また他人の意見に耳かたむけること、こうした能力です。レポートを書くというのは、これらの能力を総合的に鍛えることのできる、とても大切な学びの機会（チャンス）なのです。



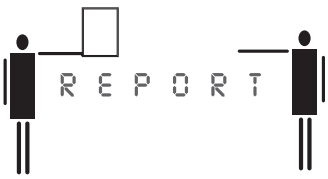
（2）“レポート”って何？

●レポートは楽なものという誤解●

ところが現実には、レポートを書くことの意味やそれにともなう難しさを理解していない人が少なくありません。

ほとんどの科目では期末に成績評価のための試験がおこなわれます。試験には筆記試験とレポート試験とがありますが、どちらの試験方法がよいかとたずねたら、おそらく大多数の学生諸君はレポート試験にしてほしいと答えるでしょう。筆記試験では「白紙で出す」という危険性があるのに対して、レポート試験だと「何か書ける」という安心感がどうもあるようです。「何か書きさえすればなんとかなる／なんとかしてもらえる」という非常に安易な気持ちがそこから透けて見えます。

かくしてレポートを提出させると、テーマに関係していると思った箇所を書物から適当に（しばしばそれと断りもしないで）抜き出しつぎはぎしたもの、自分の勝手な思い込みを根拠も示さぬまま書きつらねたもの、与えられたテーマから離れて自分の関心事に話を無理やり引き込んだもの、文章に起承転結がなく脈絡も何を言いたいのかも不明なもの、などなどのいわば“レポートもどき”が山なすことになります。いくら指定の枚数（字数）だけ書かれていても、レポートならぬそうした“レポートもどき”への評価が厳しくなるのは当然のことです。レポートなら出しさえすれば合格最低点ぐらいはもらえるだろうという甘い考えは、ここできっぱりと捨ててください。



●“レポート”とは？●

レポートには、上にあげた期末試験（定期試験）としてのレポート以外にも、授業の進行に即して適宜提出を求められるレポートがあります。自主的な学びを重視する大学の授業では、レポートは非常に重要な教育的役割を担っています。では、そもそもレポートとはどういうものなのでしょうか。

レポート（あるいはリポート）とは英語の“report”つまり調査・研究の成果を発表する“報告書”を意味します（学生の“レポート”は英語では“paper”という語を用いるようですが、ここでは日本での用法にしたがってお話しします）。したがって、自分があるテーマないし素材について調べあるいは資料をもとにして考えた成果を、他者（読み手）に理解できる形で表現したものがレポートだということになります。

広い意味では卒業論文などのいわゆる“論文”もレポートに含まれますが、特に“論文”と言う場合には内容の独創性（オリジナリティ）が重視されます。つまり既に知られていることの繰り返しではなく、新たな事実を発見したり、新しい見方や考え方を提唱したり、誰も気づかなかった結論を導き出したりというように、論者ならではの独創的な内容の盛り込まれていることが求められます。もちろん学生の卒業論文と専門研究者の学術論文とでは、求められる水準に大きな違いがあることは言うまでもありません。卒業論文の書き方については第Ⅱ章で詳しく説明がありますので、ここではこれ以上触れません。

それに対して、“論文”と区別された狭い意味でのレポートでは、独創性の要求はそれほど強くありません。もちろんレポートも、一人ひとりの個性が生みだした作品という意味では独創的なものではありますが、誰も知らなかった、あるいは考えつかなかったような内容がそこに含まれている必要性は必ずしもないのです。それよりも、与えられたテーマの意味をよく理解し、必要な素材（文献や資料）に自分自身であたってそれらをもとに筋道だって考え、その過程と結果を順を追って分かりやすく表現するという基本的な作業がきちんとなされているかが、レポートではもっとも重視されるのです。

●レポートの種類●

レポートと一口に言ってきましたが、実際には大きく２つに分けることができるでしょう。

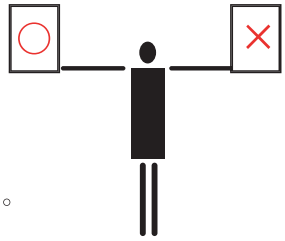
一つは学習の進行過程で課せられるレポートで、「講義レポート」や「読書レポート」「見学・実習レポート」などがあります。いずれも、自分が受けた授業や指定された文献、おこなった見学や実習について、その内容や体験を簡潔に要約しながら、自分が発見したことや関心をもったこと、疑問に感じたことなどをまとめることにより、さらに学習を進めていくための指針や動機づけを明確にさせることが主眼になります。

もう一つは、試験としてのレポートもそうですが、学習のまとめ段階でのレポート、つまりそれまでになされた授業をふまえてテーマが与えられ、それについて調べたり考えたりしたことを報告する「調査・研究レポート」です。ここでは、与えられたテーマの意味をよく考え、文献や資料を探し、問題意識を整理しながら仮説を立てて検証し、一定の結論が導き出せたところでその問題探究の全体をできるだけ簡潔にかつ分かりやすく文章で表現するという、レポート作成の総合力が問われることになります。

REPORT
- 「講義レポート」「読書レポート」「見学・実習レポート」
- 「調査・研究レポート」

以上、レポートとはどういうものかについて簡単に説明してきました。これを読まれただけでも、レポートが「何か書きさえすればなんとかなる／なんとかしてもらえる」といった安直なものでないことだけは理解してもらえたのではないでしょうか。

（3）良いレポート、悪いレポート

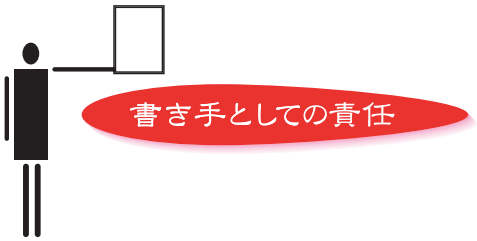


●形式面での良し悪し●

それでは、良いレポートと悪いレポートとではどういう点に違いがあるでしょうか。まず形式面からあげてみましょう。

①レポートにはふつう目安となる分量が、400字詰め原稿用紙の枚数（または総字数）で「何枚（字）以上（もしくは程度）」と指示されます。過度に神経質になる必要はありませんが、その枠から大きくはずれた舌足らずなもの、逆に冗長なものは良くありません。説明は十分に、しかし可能な限り簡潔にまとめることを心がけてください。また用紙の大きさ（A４版が標準的なサイズです）も指示されたものにし、複数枚にわたる場合はバラバラにならないようホチキスあるいはクリップ等で綴（と）じておくことが必要です（端を折って提出する人がありますがやめましょう）。受講科目名とレポートの題名、自分の学部・学年・組・番号・氏名を記入した表紙（レポート試験として提出する場合は所定の表紙）をつけることも忘れないようにしてください。

②また、参考にした文献があるのにそのことを触れなかったり、書名しかあげないのは良くありません。参考文献はすべて（数十冊にものぼるような場合は主要文献に限ることもありますが）、「著者、書名、出版社、発行年」を明記して示しましょう。文献から文章やデータを引用した場合は、引用であることが分かるようにして（文章は“「　」”でくくる）、出典（著者、書名、出版社、発行年、引用ページ）をはっきり書く必要があります。レポートといえども著作物、知的生産物なのですから、書き手としての責任が求められます。他人の着想を参考にしながらそのことに知らん顔をしたり、他人の文章を無断で使うような無責任なレポートは最悪です。引用の仕方については第Ⅴ章で具体的に説明がありますので、必ず読んでおいてください。



③レポートも書き手と読み手という人間同士のコミュニケーションです。初対面の人と話をするときに、きちんとした挨拶や言葉遣い、気遣いができなければまともに話を聞いてもらえないのと同様、読み手への配慮が感じられないレポートは悪いレポートです。たとえ上手でなくても読みやすい字で丁寧に書かれたレポート、美しく清書されたレポートからは、書き手の真剣さと読み手への思いやりが伝わり、読む側も襟を正して読む気にさせられます。逆に、クセの非常に強い字やなぐり書きされたもの、字が小さすぎたり鉛筆で薄く書かれたりしたもの、間違いを黒く塗りつぶして訂正したり欄外の挿入があちこちにある下書きのようなレポートは、内容に入る以前に真剣に読もうという意欲を読み手から奪ってしまいます。

最近ではワードプロセッサー（ワープロ）でレポートを書くことが多くなりましたが、その場合もフォントの種類やポイント（字の大きさ）、字間や行間の設定など、読みやすい形式にととのえることが必要です。

●内容面での良し悪し●

次に、内容面でのレポートの良し悪しですが、次の「2　レポートの書き方」での説明と重なりますので、ここでは簡略にとどめます。

全体として言えば、書き手が何を問題として取り上げ、その問題に対してどのように考え、そこからいかなる結論が導き出されているかが明らかで説得的に述べられたレポート、すなわち

① テーマ・対象の明快さ（何を問題にしているか）
② 根拠・論理の明快さ（どのように考えたか）
③ 主旨・主張の明快さ（何が言いたいか）

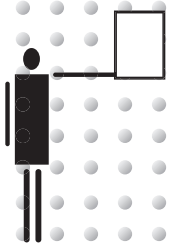
の３点をそなえたレポートが良いレポートです。

逆に、いったい何が主題か分からないもの（テーマがぼやけていたり話があちこち飛んで一貫性がないなど）、話の展開に無理があったり（根拠に乏しい断定や憶測で論じているなど）、論理的に誤っているもの（特殊な場合にしか当てはまらないことから全体を論じるなど）、書き手自身の判断が示されていないもの（いろいろな事実や考え方を羅列しただけなど）は悪いレポートです。

ですから良いレポートを書くためには、(1)自分の問題意識を鮮明（クリアー）にし、(2)テーマについて十分に考え、(3)信頼できかつ役に立つ参考文献や資料を探し、(4)それらをうまく利用し、(5)レポートの見取り図とも言うべきアウトラインをよく練り、(6)それに沿って、必要な場合は図表等も効果的に使いながら、分かりやすい文章で表現することができなければなりません。

そこで次に、以上の６つの点を順番に見ていくことにしましょう。

2 レポートの書き方



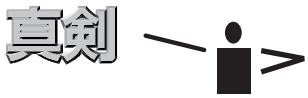
（1）問題意識をもとう

●“問題意識”とは？●

問題意識というのは、ある出来事についてこれこそが“問題”つまり“眼前に見出された解決すべき事柄”だと自覚的にとらえ（英語の“problem”とは“前に投げられたもの”という意味です）、またその問題解決に自ら取り組もうとする意識のことを言います。問題意識はレポートを書く上での導きの糸でありレポート全体を支える柱です。書き手の問題意識が明確でないと、レポート全体が焦点のぼやけたものになってしまいます。

どういう問題意識をもつかは人によってさまざまです。たとえば、同じ情報化社会という出来事を前にしても、世界市場を相手にした企業の情報戦略にすぐ目がいく人もあれば、情報を武器にした新たなビジネスチャンスの開拓に関心を向ける人、個人情報の保護や情報倫理の確立を問題にする人、社会の情報化にともなう人と人とのコミュニケーションの変容について考えようとする人などなど、そこには無数と言ってよい多様な問題意識がありえるのです。

「本棚を見ればその持ち主がどういう人か分かる」とよく言われますが、人が真剣に関心を寄せる事柄には、その人がこれまでどのように生きてきたか、今どのように生きているか、これからどのように生きようとしているかのすべてが集約されているといっても過言ではありません。

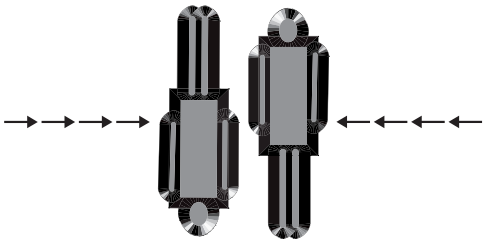


●「真剣に関心を寄せる」ということ●

しかし若い人の間では、趣味などのごくプライベートな事柄以外に「真剣に関心を寄せる」ということ自体、難しい現実がもしかしたらあるのかもしれません。私の研究室にも授業やゼミで知り合った学生諸君がいろいろな話をしにきますが、ちょっとカタい話題になると「こんな話を友だちの前でしたら浮いてしまう」と言う声を聞きます。“真剣”で“マジメ”な態度を“クライ”として敬遠し、“軽いノリ”や“おもしろ半分”を好む雰囲気があるようです。その“軽いノリ”のまま殺人にまで至ってしまったというような事件さえ、ニュースでよく目にする昨今です。真剣になることは精神の緊張を要しますが、緊張を持続することが苦手で、お手軽に即席（インスタント）の答えを欲しがる傾向も強いように思います。

「だから今どきの若者はダメだ」と言っているのでは決してありません。出口の見えない日本経済の長期低迷、大企業や政官財のトップ・エリートたちの一部を含んだモラルの崩壊、若者をターゲットにした次々と目先を変えて欲望を刺激する商品（モノやサービス）の洪水、その一方、管理され偏差値でランクづけされて自信を失い、表面的な明るさの陰でつのらせる淋しさと孤独感――自信と希望に満ちてさまざまな問題に取り組もうという意欲を萎（な）えさせるような社会のこうした閉塞状況を、“今どきの若者”の不甲斐（ふがい）なさのせいにするのは、まったく本末転倒したことだと言わざるをえません。

けれども、オトナたちの若者に対するいらだちの奥底には、「あなたたち若者こそが私たちの未来であり希望なのです」というメッセージが込められていることもまた事実です。「一方的な希望の押しつけは迷惑だ」と反発する前にもう少し聞いてください。



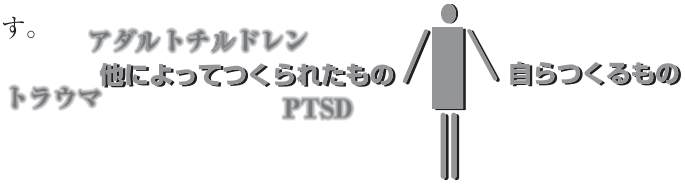
●人間存在の二側面●

人間という存在には２つの側面があります。一つは受動的存在という側面であり、もう一つは能動的存在という側面です。言い換えると、この“私”は、“他によってつくられたものとしての私”であり、同時に“自らつくるものとしての私”でもあるのです。

“他によってつくられたものとしての私”とはこういうことです。私たちの考え方（思想）やふるまい方（行動）が、自分にこれまで与えられてきた、また現在与えられているさまざまな条件によって大きく影響されていることは否定できないでしょう。たとえばあなたも、誰一人として同じではない“私”というこのユニークな人格がどのようにしてつくられてきたか、年表やアルバム片手に記憶をたどりながら一度振り返ってみてください。

私の場合を言えば、第２次大戦の傷跡からようやく日本が立ち直ろうとしたころに、港町神戸のサラリーマン家庭の末っ子（姉が２人のひとり息子）として生まれ、小学校に入学する前年に病気で数ヶ月寝たきりの生活を送り、その後遺症もあって友だちとのやんちゃなつき合い方を学習する機会を逸した反面、読書の楽しさを覚え、学歴の壁を体験した父親に小さいころから大学進学を望まれ、戦後の民主教育で育ちながら受験競争にさらされ、進学校での日常的な成績の相互比較に萎縮し、60年代の高度経済成長とともに大きくなって消費生活の高度化の恩恵に浴する一方、“豊かさ”の裏側を告発する反戦平和運動や反公害運動などの市民運動・学生運動から影響を受け……といったことが次々と思い出されます。今の私の性格や心理や行動パターンの一つ一つを、その良い面も悪い面も、「これは親の影響」「これは学校生活の―」「これは時代状況の―」というふうに、“つくられたもの”として説明することができると思います。

“他によってつくられたもの”という側面は、時には人間性への深刻な破壊的影響という形をとることさえあります。子どものころに親から育児放棄されたり虐待されたりした体験がトラウマ（心的外傷）となって、人格的な成熟が阻害されたり、大人になっても人間関係がうまく結べずに苦しむ“アダルトチルドレン”と呼ばれる人たちの存在が明らかにされたり、大震災や凶悪犯罪に遭遇したことによる“PTSD（心的外傷後ストレス障害）”が問題になっています。近年よく耳にする“自分さがし”や“癒(いや)し”も、“本当の自分ではない私”“深く傷つけられた私”として“つくられたもの”だという自己了解が前提になっているのではないでしょうか。今は人間存在のこの側面に、より多くの人の関心が集まっているようにも見えます。



けれども、同時に人間は“自らつくるもの”でもあります。たとえば私自身、高校時代に、親しくしていた友人の信頼を裏切るような行為をひそかにしてしまい、勘づいて問い詰める彼に知らぬ存ぜぬで押し通した苦い記憶があります。それをきっかけにその友人とは疎遠になってしまいました。悔やんでも悔やみきれない思い出です。もちろん、私が不誠実な行為をあえてしたことにはそれなりの理由(わけ)があります。「私のせいとはいえないいくつもの条件に強いられて私はやむをえずそうしたのだ」と、“つくられたもの”という側面を最大限自分に言い聞かせながら、その時の私は懸命に自分の裏切りを合理化・正当化しようとしました。しかし私は、もっともな理由を数え上げればあげるほど、「それでも、それはお前自身がやった行為なんだ」という内心の声をうち消すことができませんでした。つまり、やるかやらないかの最終判断が私自身の自由にゆだねられていたこと、そして他でもないこの私の意志によってその行為がなされたことを私は否定できないのです。私の行為は（あるいはそのように行為した私は）、まぎれもなく私自身が“自らつくったもの”なのです。

●問題意識は「自由に生きる」姿勢から●

その状況は、水がなみなみとつがれたコップに１滴の水を落とすのに似ています。コップの水は表面張力で盛りあがり今にもこぼれそうです。そこに１滴の水が落とされ、ついにコップの水はあふれます。さて、水があふれた原因はどちらにあるのでしょう。すでにコップに水がいっぱいの状態でさえなかったなら、水１滴くらいでコップがあふれることはありません。だから水が一杯入れられていたのが原因だと言うこともできます。けれども最後の１滴さえ落とさなければコップの水はあふれなかったわけですから、最後の１滴こそが原因だとも言えるでしょう。観察者の立場から客観的に言えば、原因は両方にあって一方にだけにあるわけではありません。軽重の度合いを別にすれば、原因としてはどっちもどっちです。

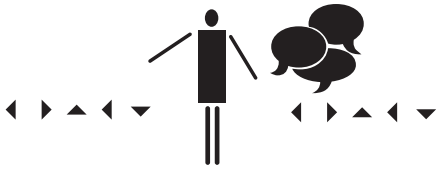
けれども、行為者（１滴の水を落とした当事者）の立場から考えてみてください。水があふれた原因を問われた時に、あなたはどのようにその問いかけを受けとめますか？「誰かがコップにあんなにまで水を入れていたからいけないんだ」とまず他に原因を求めますか？それとも「にもかかわらず、最後の１滴を落としたのは私なのだから、まずは私の責任を受けとめよう」と考えますか？

繰り返して言いますが、客観的な観察者の視点から言えばこれは二者択一の問題ではなく、双方の原因（責任）を客観的にバランスよく考えるべきなのです。しかし主体的な行為者としては、他者によってなされたことという側面を主軸にして事態を捉えるのか、それとも自らの行為の結果という側面を主軸にして事態を捉えるかの基本姿勢の違いが問題になるでしょう。つまり、“つくられたもの”の側面（必然の側面）に軸足を置いて、自分には仕方なかったことだとするのか、それとも“つくるもの”の側面（自由の側面）に軸足を置いて自分の関わりを問うのかという二者の選択になります。それはその人の基本的な生きる姿勢の選択でもあります。

「私は、親の育て方や家庭環境、教師の接し方や友だちの態度、不合理な世の中の仕組みや暗い世相等々の犠牲者だ」つまり「こんな私に誰がした！」と考えるのではなくて、「私は、自分自身を含む現にあるこの事態の当事者であり作り手でもある」と考えること、そのような姿勢をあえて基本軸にすえながら生きようとすること、これが自由に生きるということだと思います。

最初に、「問題意識というのは、ある出来事についてこれこそが“問題”、つまり“眼前に見出された解決すべき事柄”だと自覚的にとらえ、またその問題解決に自ら取り組もうとする意識のこと」と言いましたが、この「自由に生きる」という姿勢なしには、つまり「ワタシには関係ない」とか「オレにはどうしようもない」と構えている限りは、問題意識は決して芽生えないことを分かってもらいたいのです。

大学とは自由に生きることを学ぶ場だと先に言いましたが、言い換えれば、大学とはあなたが自分ならではの問題意識を育む場、あなたのこれからの人生のテーマを（少なくともその糸口を）発見する場なのです。大学を卒業してどういう職業につき、あるいはどういう社会的役割を担うのかという大きな問題も、そこに関わってくるでしょう。



●問題意識をもつには●

しかし、「いきなり問題意識をもてといわれても、どうしたらいいか……」ととまどうかもしれません。これまでお話ししてきたように、それはあなた自身の生きる姿勢にも関わることです。簡単に問題意識が向こうからやってくるわけではありませんし、便利なマニュアルもありません。一つ言えることは、あなた自身が日常生活の体験のなかで、つまり直接見聞きしたり、本や新聞で読んだり、テレビで観たり、人びとと接したり、授業で教わったりするなかで、何かひっかかりや躓（つまず）き（驚きや怒りや感動や疑念や当惑など）を感じた時に、それをその場かぎりにしてしまわないで、「何が？」「どうして？」「どんなふうに？」と興味をもって問い続けることです。人間は忘れやすい動物ですから、何かを感じたときにそれを書きとめることのできる小さなノート（あるいは電子文具）を、ポケットやカバンに入れておくのがいいでしょう。授業でノートをとる時にも、板書されたものだけを写すのではなく、「えーっ？」とか「あっそうか！」と思ったことをメモしておくことがとても役立ちます。

英語の“interest”は「間に（inter）存在する（est）」を意味しますが、「興味をもつ」とは自分とその事柄（モノであったり出来事であったりします）との“間にあるもの（関係）”にまなざしを向けることです。自分の存在をカッコに入れてただ傍観するのではありません。“つくるもの”としての自分の関わりを問いながら、何らかの意味で自分を触発した対象にさまざまな角度から探究の視線を注ぐとき、やがてそこから自分にとっての問題＝解決を求められている課題が見えてくることでしょう。「問題意識をあたためる」とはその過程（プロセス）を言うのです。

●問題意識が生まれる一例●

抽象論ばかりでは分かりにくいでしょうから、一つだけ私の体験から具体例をあげてみましょう。

もう数年前になりますが、本学の夏期語学研修の付き添いとして初めて中国（北京）に行きました。とてもおもしろく充実した研修で、参加した学生諸君も大満足だったのですが、

ただ一つだけ、特に女子学生の不評を買ったのが街なかのトイレ事情でした。

私たちはトイレ（男子トイレでいえば“大”のところ）とは鍵のかかる個室だと常識的に思っています。ところが外出先で中国の庶民的な公衆トイレに行くと、個室のしきりは腰のあたりだけで上半身が丸見えであったり、とびらに鍵がなくて突然開けられたり、大都会ではもう少ないですが場所によってはしきりもなしに腰かけて用をたす穴がただずらっと並んで空いているだけのところさえあったりします。この光景を前にして私たち（の多く）は当惑し、トイレに行くというごく日常的な行為に躓くわけです。

この躓きの体験を私たちはどう受けとめればよいのでしょうか。私たちがよくやりがちなのは、「やっぱり中国人の感覚は私たちとは違う」とか「まだまだ文化的に遅れている」といくばくかの優越感（とその裏返しの蔑視）すら交えながら突き放して見てしまうというものです。私たちの躓きはその常識外れの事態によって“つくられたもの”であり、問題は“彼ら”の側にあると自己了解するわけです。それでは問題意識は生まれません。「ウッソー！」「ヤッダー！」でおしまいです。

しかし、“つくるもの”としての視点から考えると、「排泄（はいせつ）という自然な行為を私たちはどうして恥ずかしいと感じ人目から隠そうとするのか」という疑問が湧いてきます。日本にいるときには、「隠れてするのが自然で当たり前」と思い込んでいたでしょうが、排泄する姿を人目にさらすことを恥ずかしいと感じることは必ずしも人間に普遍的な感覚でないことを、中国でのこの体験は教えてくれたのです（ちなみに、排泄の場から人目を排除しないというのはなにも中国に限ったことではなく、世界でかなりひろく見られることだそうです）。

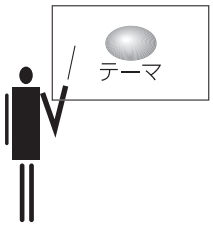
日本では近年、排泄する姿だけではなく音を聞かれることすら恥ずかしいというので、特に女子トイレでは水を頻繁に流すのが当たり前のようになり、ついには節水のために音隠しの装置さえ取りつけられたりしています。臭いを残すのも恥ずかしいと、消臭スプレーも売られています。そこまでして排泄行為を秘匿しようとするのは、逆に“異常”なことかもしれないとは思いませんか？　そこにはいったいどういう事情があるのでしょうか？

最近若者によく見られる自分の口臭や体臭への神経過敏とも共通項があるのでしょうか？

これについても人間の心理や文化、社会、倫理などなど、いろいろな角度から光を当てて考えることができるでしょう。そこからは、もしかすると日本の現代社会における私たち自身のあり方、人と人とのかかわり方にまつわるかなり奥深い問題（プロブレム）が見えてくるかもしれません。

このように、それまで当たり前と思って無意識にやりすごしてきたことに何かのきっかけでひっかかりを感じたり躓いたりする、そのチャンスを大事にしてください。そこから問題意識が生まれるかどうかは、あなたがどういう姿勢でそれに臨むかしだいです。

（2）テーマを決めよう



●“テーマ”とは●

テーマ（主題）とは、レポートの中心になる内容、「そもそもそのレポートは何について書かれているのか」の「何」のことを言います。テーマは題名（表題）という形で簡潔に表現され、レポートの最初に掲げられます。読み手は題名によってレポートが何を問題にしようとしてるかあらかじめ知り、それを手がかりにして読み進むことになります。

●テーマが与えられた場合●

レポートによっては、テーマが出題者（教員）から与えられることがあります。文献を指定されての「読書レポート」や「見学・実習レポート」なども自ずとテーマは限定されます。ただ、テーマが与えられている場合、そのテーマの意味や出題者の意図を正確に理解していないと、ピントのずれた内容のレポートになる恐れがあります。与えられたテーマについては、それに関係する事柄がそれまでに授業で取り上げられていたり、出題時に説明があったりするはずですから、自分勝手にテーマを解釈しないで、出題の意図を正確に汲み取ることが大切です。

●自分でテーマを設定する場合●

一方、「調査・研究レポート」では、具体的なテーマ設定が書き手にゆだねられていたり、与えられた大きな課題から自分でさらにテーマを絞り込まなければならなかったりします。その場合は、適切なテーマ設定ができるかどうかがレポート作成の成否を大きく左右することになります。

自分の問題意識に直結する分野のレポートであればテーマ設定もそれほど難しくないでしょうが、そうでなければこれはなかなか容易なことではありません。その分野についてある程度の知識がなければ、何を問題にすればよいかの見当さえつかないからです。

その場合は、まず仮のテーマを広くとり、関係する資料や文献にあたって自分の問題意識を整理しながらテーマを絞り込んでいくことになります。例をあげてその過程をシミュレーションしてみましょう。

①「現代の生命倫理の諸問題から、何か一つテーマをあげてレポートしなさい」という課題が与えられる。

② 授業で聞いた話を手がかりに、「不妊治療に関する問題」と大まかに仮のテーマを定める。

③ 図書館やインターネットを利用して、どのような資料・文献があるか、どんな事が問題にされているか

を探す。いきなり専門的な文献を読むことはできないので、最初は概説的な入門書やルポルタージュなど、全体像が分かるものや具体的な事例を紹介している読みやすいものを選んでざっと目を通し、トピック（話題）やキーワードをピックアップする。

④ その結果、たとえば「卵子提供の問題」というように、自分が関心をもてそうなもの、取り上げる価値があると感じたより限定された問題へとテーマを絞る。

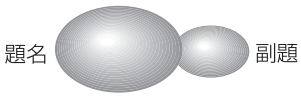
テーマをどこまで絞り込むかは、そのレポートを書くためにどれだけの時間とエネルギーをかけられるかによります。テーマが広すぎると、問題の表面をなぞっただけのぼやけたレポートになってしまいます。

一般論ですが、レポートは他の学業とも並行しながら１～２ヶ月程度で作成しなければならないことが多いですし、400字詰め原稿用紙で10～15枚ほどにまとめる必要がありますから、テーマはそれに見合う程度に絞り込まなければなりません。その意味では④にあげた例ではまだ絞り込みが不十分です。

⑤ そこで「卵子提供」に的を絞ってさらに文献を調べ、またインターネットでも日本語のホームページだけではなく、“egg donation（卵子提供）”あるいは“egg donor（卵子提供者）”などをキーワードにして関係するサイトを検索するなど、より詳細に調べてみる。その結果たとえば、「アメリカにおける卵子提供ビジネスの現状と問題」をテーマに設定する。

このように、テーマの設定と調査・研究とはキャッチボールのようにやりとりをしながら同時に進められていくことがお分かりになると思います。よく、テーマが決まらないと言って入り口のところで足踏みする人がありますが、テーマが確定してからやおら調査・研究にとりかかるというものではないのです。また、調査・研究が進み知識と問題意識が深まれば、⑤で例にあげたテーマもさらにシェイプアップされるに違いありません。

●題名と副題●



テーマは、最初に述べたように題名という形で簡潔な言葉にして表現しなければなりません。その際に、レポートの内容を読み手により明確に伝えるため、副題を設けることがあります。副題には、レポートでの議論の中心的な場（トポス）を示すもの（⑤の例で言えば、「アメリカにおける卵子提供ビジネスの現状と問題―卵子売買を支える倫理観」など）や、自分の問題意識を示すもの（同じく、「アメリカにおける卵子売買の現状と問題―ビジネス化される優生思想」など）があります。副題は読み手に対する書き手のアピールでありまた読み手の理解を助けるものですから、レポートの内容が確定した段階で必要かどうか、またつけるとすればどのようなものにするかを判断すればよいでしょう。

（3）文献・資料を探そう

●文献・資料の宝庫、図書館の活用●

先に述べたように、論文と異なりレポートでは時間をかけて数多くの文献・資料を参照する余裕がないのがふつうです。ですから、できるだけ手早くまた数を絞ってレポート作成に役立つものを探し出さなければなりません。近年は、インターネットのさまざまなホームページで多くの資料や意見が公開されておりとても便利ですが、インターネットを利用した資料収集については第Ⅲ章で詳しく説明されますので、ここでは図書出版物の形での文献・資料を中心にお話しします。

本学には、約60万冊にものぼる蔵書を擁した図書館があり、探し方さえ身につけていればレポートを書くのに必要な文献はほぼそろっていると言えます。図書館の利用方法や図書の探し方は、すでに図書館ガイダンスでみなさんに説明があったと思います。本学図書館が作成した『大阪経済大学図書館利用案内』や『文献資料の探し方』という小冊子もありますので参照してください。

●コンピュータでの検索●

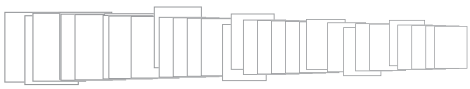
図書の検索方法は、昔ながらの図書カード（カード目録）に代わって、今ではコンピュータ（情報端末）を使った図書館ホームページ上での検索が主になっています。

図書カードでは書名か著者名から文献を探していましたが、レポートをこれから書こうという場合はテーマが大まかに決まっているだけですので、この方式では難しい点がありました。コンピュータ検索の場合には、書名（タイトル）や著者名からはもちろん、一つあるいは複数のキーワードからの検索もできるというのが大きな特徴です。ですから、自分が書こうとするテーマでは何がキーワードになるかを考えておかなければなりません。先に用いた例で言えば、「生命倫理」「生殖医療（技術）」「不妊治療」などですが、キーワードとして登録されていない言葉もありますので、うまくいかなければいろいろキーワードを変えて試してみます。一般にキーワードが単純なほど該当する文献は多くなり、逆に複雑なほど絞り込まれます。つまり、「生殖医療」で検索するよりも「生殖」あるいは「医療」で探す方が多くの文献が見つかるわけです。

ただ多くの文献が見つかるといっても、それらがすべて自分のテーマに関係するものとは限りません。本学図書館の蔵書検索の場合は分類がかなりきちんとできていますので、まったく異質な分野の図書が混在してピックアップされることは少ないですが、後で述べる一般書店の図書検索は、たとえば「セックス」のつもりで「性」をキーワードに検索す

ると、そこには「県民性」とか「相対性理論」といったような自分のテーマとはまったく関係ない文献がたくさん含まれてあがってきます。その場合には、自分のテーマに即してキーワードをより限定された語（「性行動」「性意識」など）にしたり、複数のキーワード（「性」と「青年」）にして検索し直すといいでしょう。いずれにせよ文献・資料を検索する作業は試行錯誤ですから、自分で検索条件を工夫して探してみてください。

●書架の探索●



コンピュータでの検索は便利ですが、著者や書名しかモニター画面上では分かりません。図書館では本それ自体が分類されて書架にならべられていますので、書架を見て回って関係のありそうな本を探すということもできます。この場合は現物を手にできるわけですから、書名だけでなく目次や内容にもざっと目を通すことができます。文中の見出しを拾い読みしていくだけでも、だいたいどんなことが扱われているかくらいの見当はつきます。書名が自分のテーマとぴったり合っていなくても、文中の章でその問題が取り上げられていることがありますので、手にとってたんねんに探してみましょう。

●雑誌や新聞の検索●

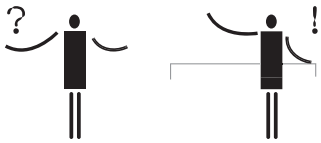
雑誌については、雑誌コーナーに最新号と数号分のバックナンバーが置かれていますので見てください。選んだテーマが最近よく話題に上るものであれば、雑誌で特集が組まれていたりすることもあります。図書館のホームページからは、雑誌論文・記事（学術雑誌と一般雑誌の両方を含む）の検索や、朝日新聞と日本経済新聞の記事検索もできるようになっています。もちろん図書館には主要新聞の縮刷版もあります。もしテーマが時代状況と関わりの深いものなら、コンピュータ検索で関係記事の年月日を確認してから縮刷版に当たれば、紙面全体や前後の記事からその当時どのような社会状況だったかが分かるでしょう。

●その他の文献・資料探索法●

先に少し触れましたが、最近では紀伊國屋書店など大手書店や図書の流通団体がホームページを開設していますので、それらを利用して文献を探すこともできます。図書館ホームページのリンク集のところに、いくつものアドレスが掲載されています。検索の仕方は基本的に図書館の場合と同じですが、とても便利なのは、図書館にない本も探せるのは当然として、本の表紙の写真や目次が載っていたり、著者紹介や簡単な内容解説までつけられている場合があることです。それによって書名に加え、自分のテーマに関連する研究をしている著者（研究者）の名前が分かれば、図書館での検索にも活かすことができます。

また、役に立つ文献が一冊でも見つかれば、その中に引用文献や参考文献がたくさんあげられているでしょうから、それを頼りにさらに文献を探すことができます。

文献・資料の探索は地味な作業ですが、レポートを作成するための準備作業としてとても大事ですし、またこれはという文献が見つかったときの喜びも大きいですので、コツコツと探してみてください。



●アドバイスを求める●

図書館のカウンターには本学の蔵書や文献・資料の探し方に精通した職員の方たちがおられますから、わからないことがあればどんどん質問や相談に行ってください。適切なアドバイスを受けることができるでしょう。とは言っても、「何かいい本はないですか？」と最初からゲタを預けたような安易な「相談」ではだめです。まずは自分でできるところまで努力して探しましょう。

必要な文献・資料が特定できれば館内で、あるいは借り出してじっくりと読むことになりますが、図書館の本は原則として１点につき１冊しかありません。他の人の利用のことも考えて、不必要に多くのものを借り出さないという気遣いも忘れないようにしてください。

（4）文献・資料を読み、ノートしよう

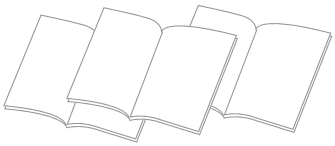
●広く全体像をつかみ、問題をピックアップする●

文献・資料が見つかればそれを読んでいくことになります。

まだテーマが十分絞り込めていないのであれば、広く文献を見渡しながら全体像をつかみ、特に関心をひく問題をピックアップしなければなりません。比較的短期間で大きく内容をつかむわけですから、自分で購入した本なら重要と思う箇所にマーカーで線を引きながら読みます。図書館の本は絶対に汚したり折ったりしてはいけませんので、重要なページに目印として紙片を挟むか、痕（あと）の残らない付箋（ふせん）を貼るか（紙のもろくなった古い図書ではだめ）しておくと、後で要所を見直すときに便利です。

もし余裕があるならノートを用意して文献ごとにページを当て、たとえば「青野由利『遺伝子問題とは何か』新曜社，2000」のページに、「各国のゲノム計画への取り組み：pp.28-30」（複数のページにわたる場合は「pp」と表記する）という具合に、問題にされている事柄とそのページを簡単にメモしたリストを作っておくとさらによいでしょう。同じ事柄が何カ所かで取り上げられている場合には、該当するページ数を書き加えていけば一種の索引にもなり、レポート文章化の段階でも役立ちます。

●じっくり精読しノートをとる●



すでにテーマが絞り込めている場合は、手にする文献もそれなりに精選されているはずなので、じっくりていねいに読みながら（精読）内容を理解し、レポートの骨子を練っていくことになります。

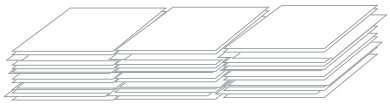
この場合も、ノートに重要と思われる箇所を要約して、メモをとりながら読むといいでしょう。何が重要かは自分の問題意識と関わることなので、本に書かれている内容をすべて網羅しようとは思わないことです。また、ある程度読み進まないとどこが自分の書こうとするレポートにとって重要か見えてこない場合もあるので、たとえば１章とか数章、あるいは１冊全体を読み終えてからノートをとるやり方もあります。

レポートで引用する可能性があると思われる特に重要な部分については、正確に抜き書きをしておくか、そのページのコピーをとっておきます。図書館内にもコピー機が設置されていますので、所定の用紙に書名とコピーするページなど必要事項を記入して利用しましょう。

ノートを取るときに、たとえば「ドイツは、ナチス時代の人権侵害への反省から、ゲノム計画に慎重な姿勢」と要約したところに「日本では過去の反省はどう活かされている？」と書いておくなど、そこで自分が感じたことや疑問に思ったことがあれば一緒にメモしておきます。

ノートの代わりに、コンピュータのワープロ・ソフトやデータベース・ソフトを使って要約や抜粋を作っておくことができれば、後でレポートのアウトラインを組み立てたり文章にまとめるときに、いちいちノートから書き写さなくても、そのままあるいは手を加えて利用することができます。

●多様な文献・資料を参照する●



レポートの作成は、比較的短期間でしなければならない場合が多いとはいえ、文献にしても資料にしても、１点しか参照しないというのではよいレポートを書くことはできません。１点だけだと、その著者・作成者の主張や視点に引きずられて、ともすればレポートがその要約で終ってしまうことになりかねませんし、その文献・資料に問題があっても気づかないことがあります。可能な限り多くの文献・資料を参照することを心がけてください。その場合も、同じテーマを異なった視点から扱ったものを加えればさらに良いでしょう。自分の考えに合ったものばかりでなく、正反対の意見や立場から書かれたものも読めば、自説を批判的に検証することができます。

（5）アウトラインを組み立てよう

outline

●アウトラインに取りかかる●

文献・資料が一通りそろい、マーカー、付箋、ノート等を用いた重要箇所のピックアップができれば、いよいよレポートのアウトライン（見取り図）を組み立てます。

これまでの準備作業で自分の問題意識がかなり明確になってきている場合は、すぐに取りかかってもいいのですが、まだそれほど明確でないならもう一度ピックアップした箇所にすべて目を通し、そこから何が言えるか、自分としては何を伝えたいか、１本のストーリーを考えるようにして読み返してみます。その時も、考えついたことがあればその場でメモをしておきましょう。せっかくよい着想が浮かんでも、そのままにしておくとすぐに忘れてしまいます。

●全体構成の枠組み●

序　論　　本　論　　結　論

論文も同様ですが、レポートの場合も構成の大きな枠組みは、①序論、②本論、③結論という展開を目安に考えればよいでしょう。

①序論では、このレポートで自分がどういうテーマをどういう問題意識から扱おうとしているかを説明します。自分が読み手にレポートの意図を説明し、問題を提起する部分です。

②本論は文字通りレポートの中心部分です。序論で示された問題に自分がどのように取り組み、どう考えたのかを説明します。

③結論では、自分がこの問題と取り組んだことを通して何を発見したか、最終的に自分は何を主張したいかを述べます。

こうした展開は、事件の謎を解き真犯人に迫っていく推理小説や刑事ドラマのストーリー展開に似ています。つまり、事件発生→遺留品や情報の収集と整理→事件の背景や犯人像の推理→容疑者のピックアップ→裏付け捜査と容疑者の絞り込み→証拠固め→犯人特定と逮捕という展開です。先にあげた三段階と合わせて整理すると次のようになるでしょうか。

① 序　論

事件発生（テーマの説明と問題提起）

② 本　論

遺留品や情報の収集・整理（前提となる事実関係やデータの確認）

＊これは序論に含めてもよい

事件の背景や犯人像の推理（全体情況の説明と論点の整理）
容疑者のピックアップ（原因特定や問題解決に向けた仮説の提示）
裏付け捜査と容疑者の絞り込み（データと推理による仮説の検証）
証拠固め（予想される反論も視野に入れた論拠の確認）

③ 結　論

犯人特定と逮捕（反証に耐えうる自らの主張の提示）

このような枠組みを参考にし、最初は箇条書きでよいですからレポートのアウトラインを描いていってください。上に述べたのは主として調査・研究レポートを想定した枠組みですので、これを自分のレポートに機械的に当てはめて考える必要はありません。しかし、レポート全体がいわゆる「起承転結」とも言われるような論理的な話の流れ（ストーリー性）をもち、その柱として自分のテーマ・問題意識が一貫しているという構造は、すべてのレポートにとって必要なことです。単なる事実の羅列やいろいろな本から引用のつぎはぎ、不必要な資料の掲示や必要なデータの欠落、話題の分散や議論の逸脱、論理の飛躍や根拠に乏しいひとりよがりな意見の主張といった悪いレポートの諸要素は、アウトライン段階でのしっかりした準備で防ぐことができます。

（6）文章にまとめよう

●文章化にとりかかる●

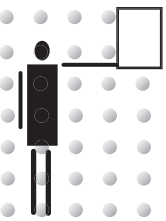
アウトラインが固まれば、文章化にとりかかることになります。文章化は、必ずしもアウトラインの順番にしていかなければならないとは限りません。場合によっては結論から書き始めるということもあるでしょう。自分が書きやすいところから取りかかればいいのです。

また文章の要所要所に図表や引用を挿入することは、読み手の理解を助けたり自分の主張を明確に印象づけたり、あるいは文章の展開にメリハリをつける上でも非常に有効です。ただ、図表に頼りすぎたり、不必要あるいは長すぎる引用は、逆効果であることを覚えておいてください。ここぞというところで適切な図表や引用を効果的に配置する工夫が必要になります。用いた図表や引用文に必ず出典を明記しておくことは、先に注意した通りです。

文章の書き方についての具体的な説明と指導は第Ⅳ章で詳しくなされていますので、文章を書くにあたってはそちらをじっくりと読んでください。

●レポートとともに成長する●

実際に書き始めると、当初考えていた内容を変更しなければならなくなるかもしれません。文章に書くということは、自分の考えを外に表現することで自分自身がそれを客観的に捉え直すことができるということです。書くことによってそれまで気づかなかった自分の考えの弱点や欠点が見えてくることも多いのです。また、自分の問題意識や考え方自体も、レポート作成の全過程を通して刻々と変化・成長するものです。ですから、文章化のための時間はゆっくりとっておき、内容全体を絶えず見直しながら、レポート作成のダイナミズムを楽しむくらいの余裕をもって臨んでください。

最初に述べたように、レポートといえばお手軽なもの、とにかく何か書けばすむものという印象を抱いている人が残念ながら少なくありません。けれどもレポート作成は、世界を見つめ・他者の意見に耳かたむけ・自分を反省しながら、問題を捉え・考え・原因と解決の糸口を見出し、それらを筋道だって説得的に表現するという、自立した自由な人間として生きていくうえでの非常に重要な能力を鍛えてくれる「道場」と言えます。一つひとつのレポートを「やっつけ仕事」でごまかすのではなく真剣に取り組むなら、学生生活の四年間でみなさんには、自分の意見をもちそれをきちんと表現できる一人前の人間としての能力と自信が身につくに違いありません。そのための貴重な機会をぜひ活かして成長してくださることを願っています。

世界を見つめる
他者の意見に耳をかたむける
自分を反省する
問題を捉え、考え、原因と解決の糸口を見出す
筋道だって説得的に表現する